

言心先生の中国便り

故郷と現代中国

最近、中国の有名な作家閻連科の故郷について書いた文章を読んで、面白いと感じた。閻氏の故郷は中国の河南省にある人口数千人の村である。中国という国名は、昔の中国人が自分達が住んでいる場所が世界の中心であると信じたことに由来する。河南省は中原と言い、それは中国の真ん中を意味し、閻氏の故郷はさらに河南省のど真ん中にあり、村人は自分達が世界の中心の住民と自負している。

閻氏が少年時代の記憶には、皆貧乏で、しかし善良、単純で美德のある村人ばかりが残っている。ある日、村に若い女性の乞食が来た。彼女は言葉を使わず、出身も分からなかった。しかし、村人は家で一番いい食事、綺麗な布団と

衣裳を彼女にやった。

ところが、数十年後の今、閻氏が再び故郷に帰って目にした物事は予想外であった。まず、昔より豊かになったが、善良さ、単純さ、美德は村人から離れた。散乱したゴミ、無管理の道路、破壊された原生林等を見て、閻氏は金銭が村人の頭の中で一番大切に、一番高く位置づけられていると推測した。閻氏の実家は二年間で四回も泥棒が入っていた。

今中国の農村の村長は村民の選挙で選ばれるようになったが、村民にとっては大変迷惑とも、利益になることも言える。選挙中、候補者は公然と村の料理店を貸切り、村民はそこで無料で好きな料理を食べられる。また、金銭的な賄賂や他の候補者を攻撃することも許される。ある日、二人の候補者がお金を持つて閻氏の家まで選挙のことを頼もうとやってきた。両方とも友人であるため、閻

氏の兄は昼間は留守にした。彼は、民主主義が一番悪い制度で、村の民主選挙のせいで自分は深夜にしか戻れない罪人になってしまおうと自分を皮肉った。当然、当選した村長が後に大きな利益を手に入れると村人は皆知っている。

閻氏が帰省して重病の叔父を見舞いに行った時、叔父は文化人の閻氏の手を握って、最初にした話題が日中の領土問題であった。「いつ釣魚島を占領するのか？今の国のリーダーは弱腰だ。最も有効な方法は、原子爆弾を投下すると威嚇することである。」という叔父の言葉に閻

氏は驚かされた。

閻氏は故郷が豊かになった代価として、環境が汚染されて村民の美德が喪失したと考える。また、故郷の人々の生活は現代的になったが、文化・文明は進化してないと感じる。そして、四千年の歴史を持つ中華文化のすべてを中国人は誇りだと思っているが、その真髄を真面目に考える人が少ないと閻氏は総括した。

文書の最後の「私の故郷を大きくすれば、中国である。中国を小さくすれば、私の故郷である。」という表現は非常に印象的である。

閻連科氏

私の故郷は物質的には豊かになったが、村民の美德は衰失した。

四千年の歴史を持つ中華文化を中国人は誇りに思っているが…

